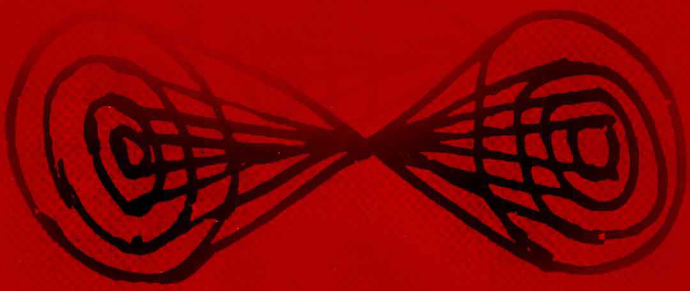

モーパッサン

女の一生　ベラミ
脂肪の塊　短　編

岡田真吉・中村光夫・杉捷夫訳

世界文學大系

筑摩書房版

世界文学大系 44

モーパッサン

昭和33年9月10日発行

定価450円

訳者　岡田真吉
中村光夫
杉捷夫

発行者　古田晁

印刷者　山元正宜

発行所　株式会社 筑摩書房
東京都千代田区神田小川町2の8
振替東京 165768　電話(29)局7651

目次

女の一生　岡田真吉訳　5
ベラミ　中村光夫訳　131
脂肪の塊　杉捷夫訳　305
短編　杉捷夫訳
山小屋　329
ペルル嬢　337
橄欖畑　347
シモンのパパ　363
わら椅子直しの女　369
狂女　373
海の上のこと　376
ジュール叔父　379
ひも　384

老人 388
雨がさ 393
くびかざり 398
酒樽 404
帰村 407
あな 411
クロシェット 416
港 420
モーパッサン論 レフ・トルストイ 木村彰一訳 426
解説 中村光夫 439
年譜 446

装幀 庫田 叡

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

モーパッサン

Envoi d'Amour
dans le jardin des Tuileries.

Accours, petit enfant dont j'adore la mère
Qui pour te voir jouer sur ce banc vient s'asseoir.
Pâle avec les cheveux qu'on rêve à sa chimère
Et qu'on disait blonds aux étoiles du soir.
Viens là, petit enfant, donne ta lèvre rose,
Donne tes grands yeux bleus et tes cheveux frisés.
Je leur-ferai porter un fardeau de baisers.
Afin que, retourné près d'elle à la nuit close,
Quand tes bras sur son cou viendront se refermer,
Elle trouve à ta lèvre et sur ta chevelure
Quelque chose d'ardent aussi qu'une brûlure!
Quelque chose de doux comme un besoin d'aimer!
Alors elle dira, frissonnante et troublée
Par cet appel d'amour dont son cœur se défend,
Prenant tous mes baisers sur ta tête bouclée,
— "Qu'est-ce que je tens donc au front de mon enfant."

モーパッサン自筆詩稿

女の一生

I

ジャンヌは、自分のトランクをかたづけ終ると窓べに近よった。しかし雨はやんでいなかった。

激しい雨が、昨夜は夜どおし窓ガラスや屋根にあたって音をたてていた。低くたれて水気を含んだ空が割れて、まるで地上に全部流れつくしたかのように、地面はぐちゃぐちゃのパン粥と化し、砂糖のようにどろどろに溶けていた。突風が重々しい熱気をはらんで通りすぎた。あふれ出た小川の水音が、ひとけのない往来にいっぱいに響きわたって、家々は海綿のように室内に入りこんだ湿気を吸いこみ、地下室から屋根裏まで、壁々に汗をかかせていた。

前日修道院を出て、とうとう永久に自由の身になったジャンヌは、かねて長い以前から夢見ていた人生のすべての幸福をとらえるに心はやるまま、父親が天気が晴れなかったら出発をためらいはしないかと心配だったので、ひっきりなしに朝から地平線のようすをうかがっていた。

やがて、ジャンヌは、自分の旅行鞄のなかに暦を入れるのを忘れていたのに気がついた。壁の上から、ひと月ひと月わかれていて、絵のまんなかには金文字の一八一九年の日づけが書かれている小さな厚紙をもぎ取った。それから、鉛筆で最初の四つの欄を消し、自分の修道院を出た日である五月二日まで、毎日書かれている聖者の名にみんな線を引いた。

扉のむこうで、叫び声が聞えた。「ジャネット」

ジャンヌは答えた。「おはいりなさい。お父さま」すると、父親が現われた。

男爵シモン・ジャック・ル・ペルテュイ・デ・ヴォーは、すこし狂的なところはあったが、善良な前世紀気質の貴族だった。ジャン・ジャック・ルッソオの熱心な崇拝者で、自然や野原や森や禽獣やにたいして、恋人のような愛情をいだいていた。

生れながらの貴族である父は、本能的に九十三年（一八九三年、公安委員会がつくられて、恐怖政治のはじまった年）を憎んでいた。気質から言えば哲学者で、受けた教育は自由主義だったので、専制政治は大きらいだった。ただ、その憎悪心は力みかえったものではあったが、積極的にどうしようというほどのことはなかった。

父の大きな力であり、また大きな弱点であったのは、その人のよさだった。愛撫し、与え、抱きしめるに何本腕があってもたりないほどの善良さだった。神様のような善良さで、ばらばらで抵抗力がなく、あたかも意志の力がなんとなくにぶっていて、気力にどこか一本欠けたところがあるように思われた。それは、ほとんどひとつの悪徳でさえあった。

理論家である父は、娘を幸福で、善良で、正直で、優雅な女にするために、娘に対するすべての教育方針をいろいろと考えめぐらしていた。

娘は、十二歳になるまで家に暮していたが、その後は、泣いてたのむ母親の願いも聞き入れずに、サクレ・クウル修道院に入れられた。

父は、娘を厳重にそこへ閉じこめておいた。世を離れて、人に知られず、浮世のことをすこしも知らずに育てさせた。生長の後、みずから一種の道理にかなった詩的な情操教育をほどこすために、娘を十七歳になっても、無垢のままで返してもらいたいと望んでいたのだった。そして、田園に暮し豊かな大地のなかに生きて、純真な恋愛、動物の単純な愛情、人生の平静な法則を見て、娘の魂の扉を開き、その天真らんまんさに眼を開けさせようと思っていたのだった。

ジャンヌは、いま修道院を出た。輝かしい気持に燃えて、胸は活気と激しく幸福を求める心に、いっぱいになっていた。かつての昼のなにをなすこともない退屈さ、夜の長いつれづれ、いろいろな希望に責めさいなまれた孤独の生活のうちに、何度となく自分の心に往来したあらゆる喜び、あらゆる美しい運命にすぐにも飛びつきたい思いだった。

ジャンヌは、肌の色も色あせて見えるほどのつやつやしい金髪のおかげで、ヴェロネエズの肖像画を思わせた。その貴族らしいほんのりとバラ色を漂わせた肌は薄いうぶ毛にぼかされて、太陽の光に愛撫されるとき、ほのかにあお白いビロードを見るような感じを与えた。両眼は青かった。オランダ製の陶器人形の顔がもつあの透きとおらぬ青色だった。

左の小鼻に一つ、やっと見わけられるくらい皮膚の色によく似たちぢれ毛が二三本はえている。右のあごに一つ、二つの小さなほくろをもっていた。からだは大きかった。胸はすっかり成熟し、胴体は波打つ美しい曲線を描いていた。はっきりした声は、ときどきあまりにかん高く響きすぎるように思えた。しかしその朗らかな笑い声は、周囲にいつも喜びを投げかけた。しばしば髪の毛をなでつけるためかのように、こめかみに両手をもってゆく身ぶりをする癖があった。

ジャンヌは、父親のもとに走りよると、かたく抱きしめながら接吻して言った。「ねえ、発ちましょうよ」

父は、ほほえみながら、かなり長く伸びてはいるが、もう真白になっている白髪頭を振った。そして、窓のほうに片手を伸ばして、

「どうして、こんな天気に旅行がしたいんだね」

しかし、娘は無邪気な優しい調子で父親に懇願した。「ねえ、お父さま、出かけましょうよ。お願いですわ。午後になれば、晴れてきますわ」

「でも、おまえのお母さまが承知すまい」

「だいじょうぶよ、きっと約束するわ、お母さまのほうはわたくしがひきうけてよ」

「もしおまえがお母さまになっとくさせることができたら、わしのほうはかまわんよ」

そこでジャンヌは男爵夫人の部屋へ駆けこんだ。出発の日を待ちに待って、だんだん待ちきれなくなってきたのだった。

サクレ・クウル修道院に入って以来、ジャンヌはルウアンを離れたことはなかった。父親が一定の年齢になるまで、どんな気晴らしも許さなかったからである。ただ二度だけ半月ばかりパリへ連れて行かれたことがあったが、パリは都会であって、彼女の夢みているのはいなかだけだった。

ところが、いまこの夏を、プウプルの所有地にあるイポオルに近い崖の上に築かれた祖先伝来の古い館にすごすことになり、ジャンヌは海辺でのその自由な生活に限りない喜びを期待していた。それにその邸宅は、これからさき結婚したあかつき、永住するために娘に贈られることにきまっていた。

前の晩から休みなく降りつづけた雨は、乙女の生涯の最初の大きな悩みだった。

しかし、三分ばかりたつと、ジャンヌは走りながら母親の部屋から飛び出してきて、「お父さま、お父さま、お母さまがご承知なさったわ、車に馬をつけさせて」と家じゅうに響くような大声をあげた。

豪雨の勢いは、すこしも衰えていなかった。馬車が玄関の前に横づけにされたときは、さらに勢いを増したといってもよいくらいだった。

ジャンヌが馬車に乗りこもうとしたとき、男爵夫人が片方を夫に、もう一方を青年のように頑丈ですらりとした背の高い小間使に支えられて、階段を降りてきた。その小間使はコオ州に生れたノルマンディ女で、せいぜい十八歳ぐらいだったが、すくなくとも二十歳ぐらいに見えた。ジャンヌの乳姉妹だったので、男爵家では、ちょっと第二の娘のように取り扱われていた。名前はロザリイと呼ばれた。

ロザリイのおもな役目は、ここ数年以来絶えず悩んでいた心臓肥大症のためにふとってきた女主人の歩行を助けることにあった。

男爵夫人は、ひどく息をきらしながら、古い邸の玄関の石段にやっとたどりつくと、水が小川のように流れている中庭をながめてつぶやいた。「これではまったくむちゃですわ」

夫は、あいかわらずほほえみながら答えた。「でも、出かけようと言ったのはあんただよ。アデライッド夫人」

妻がアデライッドなどというごたいそうな名前をもっていたので、夫はいつも、ちょっとからかいぎみの尊敬の意をこめて、その名のあとに《夫人》という敬称をつけるのが常だった。

やがて、夫人がふたたび歩き出して、かろう

じて車に乗ると、車の震動をやわらげるバネがみんなたわむのだった。男爵がその横にならんですわり、ジャンヌとロザリイとは二人にむかいあった座席に腰をおろした。

台所女のリュディヴィヌがたくさんの外套を持ってきて人々のひざの上に掛け、さらに足の下に二つの籠をかくした。それから御者台にいるシモン爺のそばによじ登ると、頭からすっぽりとかくす大きな毛布にからだをくるんだ。玄関番夫婦は、玄関の扉を閉じながら見送りに出てきた。彼らは、あとから荷馬車で送るべき荷物についての最後の注意をいろいろと受けていた。やがて車が出発した。

御者のシモン爺は、雨に打たれながら頭をたれ背を丸くして、三重えりの御者外套の中にからだがすっかり見えなくなっていた。うなるような突風が馬車の窓ガラスを打って、道路に水があふれ出た。

四輪馬車は、二頭の馬の速歩で河岸を矢のようにくだり、大きな船のならんだ景色に沿って進んで行った。船の帆柱や帆架や綱具が葉の落ちた木々のように、どしゃ降りの雨空に悲しげにそびえていた。やがて、馬車は、長いモン・リブウデ街にさしかかった。

まもなく、牧場を横ぎった。ときどき、水に濡れた柳の木が一本、死骸のようにぐったりと枝々を倒して、水気を含んだ霧を通して重々しい姿を見せていた。馬の蹄鉄がピチャピチャと音を立てて、四つの車輪が泥をはね飛ばした。

だれも、口をきくものがなかった。人々の心も、地面と同じように湿っているように思われた。お母さまは、あおむけに頭をもたせかけてまぶたを閉じた。男爵は陰気な目でなんの味もない、水に濡れた田園の姿をながめていた。ひざの上に包をのせたロザリイは、庶民階級の人間に特有なあの動物的な夢想にふけっていた。しかしジャンヌだけは、このとめどなく降るなま暖かい雨のもとにあって、今まで閉じこめられていた植木がふたたび外気にあてられたときのように、生きかえったような気持を感じていた。心の感じた喜びの激しさが、木の葉の茂みのように彼女の心を悲しみから護ってくれていたのである。ジャンヌはなにも口には出さなかったけれども、なにか歌いたくてたまらなかった。片手を外にさし伸ばして、それにいっぱいの水をためては飲んでみたくてたまらなかった。疾駆する馬に運ばれて行く楽しさ、荒涼たる風景を見るのも、この豪雨のさなかに気持の安らかさを感じるのもうれしかった。

激しい雨のなかでつやつやと光っている二頭の馬のお尻からは、湯気が立ちのぼっていた。

男爵夫人は、すこしずつ眠たくなってきた。たれさがった六本の巻髪に正しくふちどられた顔は、大きく波形をなして三段にくびれた首にやんわりとささえられて、少しずつうなだれてきた。その首のくびれの最後のうねりは丸くふくれあがった胸のなかへと姿を消していた。頭は呼吸をするたびにもちあげられるが、またがくんと落ちこんだ。両頬はふくらみ、なかばあけられた唇のあいだから、かなり強いいびき声が聞えてきた。そのとき夫は妻のほうにかがみこんで、そっと、ふとったおなかのうえに組みあわされた両手のなかに、小さな革のさいふを置いた。

その触感が夫人の眼をさまさせた。夫人はうるんだ目を開くと、眠りを中断されたもののあの茫然とした気持で、その品物をながめた。さいふが落ちて開いた。金貨や紙幣が馬車のなかに散らばった。夫人の眠りはすっかりさめてしまった。そして、娘の陽気な心はけたたましい笑い声となって爆発した。

男爵は、金を拾い集めて、妻のひざの上に置いた。「これがわしのエルトオの農場を整理した残金のすべてだよ、これからしばしば住むことになるプウプルの屋敷を修繕するために、あの農場は売ってしまったのだよ」

夫人は六千四百フランを数えると、静かにそれを自分の懐中にしまった。

それは、両親が残してくれた三十一の農場のうち、こうして売られた九番目のものだった。しかしまだ、約二万リイヴルばかりの小作料をもっていた。それももっと管理をよくすれば、一年三万リイヴルには、たやすくすることができたろう。

男爵夫妻は質素な生活を送っていたから、もし一家のうちに、人のよさといういつもあけっぱなしの底なしの穴さえなかったならば、それ

だけの収入でじゅうぶんやってゆけたであろう。その人のよさが、ちょうど太陽が沼の水をからすように、手の中のお金をからすのだった。お金はこぼれ、逃げ、消えうせた。しかしどういうふうにだかは、だれにもすこしもわからなかった。ただ、いつも夫妻のひとりがこう言っていた。「どうしてこうなるのかわたしにはわからない。きょうもたいしたものも買わないのに、百フランつかってしまった」

このたやすく物を人に与えることが、また夫妻の生活の大きな幸福のひとつだった。ふたりはその点では、いつも人々を感動させるほどぴったりとよく理解しあっていた。

ジャンヌがたずねた。「もう、わたくしのお屋敷、りっぱになっていて」

男爵は、陽気な口調で答えた。「じきおまえが自分で見れるよ」

少しずつどしゃ降りの激しさが弱ってきた。そしてもう、一種の霧のように非常に細かい雨のしぶきが風にはためいているだけだった。黒雲におおわれていた大空も、高くなり明るくなって見えた。とつぜん、眼に見えぬ雲のすきまから、太陽の長く斜めにさした光が、牧場の上に降りそそいだ。

すると、雲が割れて大空の真青な地が現われた。まもなくその裂け目は、引きわけられた幕のように、しだいに大きくなった。そして深々と紺碧に澄みわたった美しい空が地上にひろがった。

新鮮で心持良い微風が、大地の喜びの吐息のように通りすぎた。庭や森に沿うて進むとき、人々はときどき、翼を乾かしている小鳥の用心深い歌声を聞いた。

夕闇が迫ってきた。ジャンヌをのぞいてすべての人々はいま馬車の上で眠っていた。二度、馬車は道ばたの駅亭にとまって馬を休ませ、すこしばかりの燕麦と水とが与えられた。

太陽は沈んでしまった。遠くのほうで寺院の鐘が鳴った。小さな村落で、馬車に燈がともされた。空にもまた無数の星が輝きだした。燈火をつけた家々がところどころに現われて、暗闇を一点の火で点々と綴っていた。やがてとつぜん、丘の背後にモミの木の枝をとおして、真赤に大きな月が、とろんと眠っているような姿を現わした。

だいぶ暖かかったので、窓ガラスはおろしたままだった。ジャンヌも夢想に疲れ楽しい幻想にあきはてていまは眠っていた。ときどき、からだを長々と横たえているためにしびれがきれてくると、両眼を再び開いた。そういうとき外をながめると、明るい夜景の中にうつり行く、農場の木や、または畠のあちこちに横になって首をもたげている豚などの姿が見えた。それから彼女は新しい姿勢を求めて、いましがたちらっと心に描かれたばかりの夢の続きを見ようとした。けれども、馬車のたえまのない響きが耳をいっぱいにして頭を疲らせたので、彼女は身も心もぐったりとなって両眼をふたたび閉じた。

やがて馬車はとまった。数人の男女が手に角燈を持って、馬車の昇降口のまえに立っていた。目的地へ着いたのである。とつぜん眼をさまされたジャンヌがすばやく飛びおりた。父親とロザリイは、ひとりの農夫に燈をかざさせながら、まったくぐったりとしてしまった男爵夫人をほとんどかかえるようにして家のなかへ連れこんだ。男爵夫人は苦しそうにわけのわからぬことをブツブツつぶやきながら、たえず低い今にもたえいらんばかりの声で、「ほんとにまあ、かわいそうに」とくりかえしていた。彼女はなんにも飲みたがらず、なんにも食べようともせず、床につくとたちまち眠ってしまった。

ジャンヌと男爵は、ふたりさしむかいで夕飯を食べた。

父と娘は顔を見あわせてほほえみ、食卓ごしに手を握りあった。それから、ふたりとも子供らしい喜びに胸をおどらせて、修繕された邸宅を見まわりはじめた。

それは、農場にもお城にも似よったあの宏荘なノルマンディ特有の邸宅の一つだった。もう灰色に変った白い石で築かれ、一族全部をいれるほど広大なものだった。

巨大な玄関の間が家を二つにわけて、いっぽうからいっぽうへと突きぬけ、その両端に大きな入口が開いていた。二重の階段が、中央だけを残してその入口にまたがるようにつくられ、さらにその二つの階段は、橋のように二階でつながっていた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

階下の右手にあるとほうもなく大きな客間に入ると、そこには木の葉のあいだを小鳥の飛んでいる模様の壁紙が張られていた。縫い目のわるいつづれ織を張った家具は全部、そのままラ・フォンテエヌの『寓話』のさし絵だった。ジャンヌはごく子供だったとき大好きだった狐とコウノトリの物語を描いてある椅子を見つけだして、身震いするほどうれしかった。

客間にならんで、古い本でいっぱいになった図書室と、使っていない部屋が二つ開いていた。左側には、新しい板壁の食堂、納戸、配膳室、台所、浴室つきの小さな部屋があった。

二階にはずっと長く廊下が通っていた。十ある部屋の扉が十、その廊下にむかってならんでいた。右手のいちばん奥には、ジャンヌの部屋があった。父と娘はそこに入った。男爵はその室を新しくなおしたばかりだった。もっとも屋根裏の物置に不用になっていた壁紙や家具を使っただけにすぎなかった。

フラマン製の非常に古い壁紙が、その部屋に異様な人物たちをたくさん描きだしていた。

しかし、自分の寝台を見た若い娘は喜びの叫びをあげた。四つのすみに真黒で、蠟光りした柏製の四羽の大きな鳥が寝床をささえて、その番人をしているように見えた。寝台の両横には、二つの大きな花飾りと果実とが刻まれていた。コリント式柱頭をいただき、精巧に細いみぞをつけられた四つの柱は、バラの花とキュピッドの巻きついた軒蛇腹をもちあげていた。

まことに堂々たる姿で、年代をへて黒光りした木口がいかめしく思われたが、またいっぽう、ひどく優しい感じを与えていた。

足掛けぶとんと寝台の天蓋をおおう布が、二つの青空のように輝いていた。それらは、金糸で縫いとった大きなユリの花をところどころに星のようにちりばめた濃青色の古代絹でつくられていた。

それをじゅうぶんながめつくしたジャンヌは、持っている燈をあげてなにを描いてあるのかとその壁紙を調べてみた。

緑と赤と黄の着物をたいへん妙なふうに着たひとりの若い殿様とひとりの若い貴婦人とが、白い果実の熟している青い木の下で話しあっていた。そして、同じ色の大きな兎が一匹、灰色の小さな草をかじっていた。

ちょうどその人物の上には、遠くのほうに、おきまりのように、屋根のとがった丸く小さな家が五つ描かれていた。そしてその上のほとんど空の中に、真赤な風車が一つ見えた。

花を現わす大きな枝葉模様が、その絵全体の中をぐるぐるまわっていた。

ほかの二つの壁面は、フラマン風の服装をした四人の背の低い老人たちが家から出てきて、驚いたり、ひどく怒ったりしているしるしに両腕を空にさしあげているのが見える以外、たいへん、はじめのによく似ていた。

しかし、最後の壁紙は一つの惨劇を描いていた。兎が草をかんでいるのには変りはないが、その横に横たわっている青年は死んでいるように見えた。若い貴婦人がそれを見おろしながら、自分の胸に剣を突き刺していた。そして木の実は真黒くなっていた。

ジャンヌは一隅にごく小さな動物を見つけだしたが、それがなんであるか知ろうとはしなかった。それは、もし絵の中の兎が生きていたならば、草の芽のように食べてしまえるほどの小ささだった。しかしそれは、じつはライオンだった。

そのとき、彼女はそれがオヴィッドの歌ったピラムとティスベの不幸な物語だと気がついた。そしてその絵の単純さにほほえましく思いながらも、この愛の物語のなかに包まれている自分を幸福に感じた。それはこれからさきたえず彼女の心に、いろいろな親しい希望を話しかけ、夜ごと夜ごとに彼女の眠りのうえに、その古風で伝説的な愛情をあまがけさせることであろう。

ほかの家具は全部、いろいろな様式のものがあわせ用いられていた。それらは各時代時代に一家のなかに残されて、あの古い家々をすべてのものがまじりあった博物館のようなものにしてしまう家具だった。きらきらと輝く銅をかぶせられたみごとなルイ十四世式のたんすのそばには、これも花模様の絹布におおわれた二つのルイ十五世式安楽椅子がならべられていた。バラの木でつくった書き物机は、丸いおおいガラスの下に第一帝政時代式の振時計を見せた暖炉にむかいあっていた。

その時計は、金色の花園の上に四つの大理石の柱でつるされた青銅製の蜜蜂籠の形をしていた。長い割れ目をとおして蜜蜂籠から出ている小さな振子は、たえずその花壇の上に、七宝でできた翼をもった一匹の小さな蜜蜂を振り動かしていた。

時計の文字盤は彩色した陶器からできて、蜜蜂籠の側面にはめこまれていた。

時計は十一時を打ちはじめた。男爵は娘に接吻して自分の部屋にひきとった。

そこでジャンヌは、残り惜しげに床に入った。

彼女はもういちど最後の視線を部屋じゅうに走らすと、蠟燭の火を消した。しかし、その頭のほうだけ壁によせかけてある寝台の左手には窓があって、そこから月の光がいっぱいにさしこんで、床の上に光のたまりをひろげていた。

その光が壁に反射して、その蒼白い反射が弱弱しくピラムとティスベの動かぬ愛のいろいろな姿を愛撫していた。

足もとにあるもう一つの窓から、ジャンヌは優しい光をいっぱいに浴びた大きな木を認めた。彼女は寝がえりを打つと両眼を閉じたが、しばらくたつと再び開いた。

そのからからという響きがまだ頭のなかに聞え続けている馬車の動揺に、いまだに揺られているような気持だった。はじめ、横になればけっきょくは眠れるだろうと思ってじっと動かずにいたのだが、いらいらした気持がたちまち全身に襲いかかった。

両足が痙攣し、しだいにからだが熱っぽくなってきたので、とうとう起きあがった。足も腕も裸で、幽霊かと見まがわせるような長い寝巻をひきずりながら、床のうえにひろがった光の沼を横ぎって、窓を開くと外をながめた。

夜はひどく明るかったので、真昼のようによく見わたされた。若い乙女は、かつて少女になったばかりのころ、愛し好んだ土地の姿をふたたび見いだした。

まず前方には、夜の光に照らされて、バターのように黄色く見える広々とした芝生があった。二本の巨大な木が、屋敷の前にそびえ立っていた。北側にあるのは篠懸、南側にあるのは菩提樹だった。

広い草原の尽きる所にはちょっとした木の茂みがあって、沖から来る荒風を五列にならんだニレの木でさえぎったこの土地をしきっていた。それらのニレは、みな古いもので、たえず吹きすさぶ海風のために、ゆがめられ、短くされ、いためつけられたうえに、屋根のようにこうばいをつけて刈りこまれていた。

その囲い場のような土地は、左右をノルマンディでは peuples と呼ばれる巨大なポプラの長い並木道にくぎられていた。そしてその並木道はまた、主人たちの住居とそれに隣接した二つの農場とをわけていた。農場は、一つはクウイアール、一つはマルタンの家族たちが住んでいた。

そのポプラの木のおかげで、その屋敷はプウプル荘と呼ばれていた。その構内を出ると、ハリエニシダの点在した不毛の広い平原がひろがって、微風が夜となく昼となく音をたてて吹いていた。それからとつぜん、傾斜が百メートルばかりの直立した真白い断崖となって落ちこみ、断崖の下のほうは、波に洗われていた。

ジャンヌは、はるかかなた、星の下にまどろむように見える海のはてしなくつづく水面のうねりをながめていた。

日没後のあのしっとりとした気分のなかに、大地のあらゆる香気がひろがっていた。階下の窓の周囲にはいあがっているジャスミンは、たえず生れくる若葉のよりほのかな香りにまじり合った激しい吐息を発散していた。思いだしたように吹いてくるゆるやかな風が、塩気を含んだ空気と海草のねばねばした湿気との強い香を運んで過ぎ去った。

若い娘は、まず思いきり新鮮な空気を呼吸する喜びに身をゆだねた。田園の安らかさがさわやかな入浴のように彼女の心をやわらげた。

夕方がくると眼をさまして、夜の静けさのうちにその名も知れぬ存在をかくしているあらゆる動物が、音もたてないうごめきで薄くらがりをいっぱいにしていた。鳴き声をたてずに大きな鳥が、空中を斑点のように影のように逃げ去った。目に見えない昆虫のうなり声が耳をかすめた。そして音もたてずに走りまわる気配が、露にみちた草のあいだや、ひとけのない道の砂の上に動いた。

ただ、数匹のガマが、月にむかって短く単調な鳴き声をもの悲しげにあげているばかりだった。

ジャンヌには、その明るい夕べのようにざわめきにいっぱいになって、自分の胸がひろがってゆくように思えた。そしてとつぜん、周囲にうごめく夜の動物たちに似て、多くのもやもやとしたあこがれに心のうずうずするのを感じた。ある親和力がその生きた詩に彼女を結びつけた。夜の柔らかな明るさのうちに、超人的な心のふるえが走り、とらえることのできぬ希望の脈うつのを感じた。それは幸福の吐息に似たあるものだった。

そして、彼女は恋を夢みはじめた。

恋、二年ほどまえから彼女の心は恋の女神のおとずれを待って、いやまさる不安にいっぱいになっていた。いまこそ彼女は、自由に恋することができた。彼女はもう、ただ恋の女神に出会いさえすればよいのだ。その人に。

それはどんな人だろう。彼女にははっきりとはわからなかった。自分に問うてみたことすらなかった。その人とは彼のことだ。ただそれだけだった。

彼女はただ、自分が心の奥底からその人を熱愛し、その人も力のかぎり自分を愛してくれるのを知っているだけだった。ふたりは、今日のような夕べを、星から降る光の灰をあびて散歩するだろう。ふたりは手に手を取って、ぴったりと寄りそいながら歩くだろう。お互の心臓の波打つのを聞き、お互の肩の暖かさを感じて、ふたりの愛情を夏の夜の気持よいすがすがしさにまぜあわせるだろう。激しく結びついた二人は、お互の愛情の力だけで、二人のもっともひそやかな思いのなかにまで、たやすく入りこむことができるだろう。

そして、それは言葉では尽しがたい愛情の静けさのうちに、無限につづくだろう。

すると彼女にはとつぜん、そこに、自分のからだのすぐそばに、その人を感じたように思われた。そしてだしぬけに、漠然とした肉欲のおののきが、彼女の全身を下から上へと走った。彼女は自分の夢を抱きしめるためかのように、無意識に両腕を胸の上にしっかりと抱きしめた。未知の男へとさし伸べられた乙女の唇の上を何ものかが通りすぎて、春の吐息が愛の接吻を与えたかのように、ジャンヌは思わずくらくらっとなりかけた。

とつぜん、かなた館の背後の街道の上を、夜の闇をついてだれかの歩く足音が聞えた。もの狂わしくなった魂の情熱のうちに、不可能なものを、神の恵みの偶然を、神聖な予感を、運命の小説的な結合を信じようとする激情のうちに、乙女は《もしや、あのかただったら》と考えた。そして足音の当人が一夜の宿を乞うて、自分の家の玄関に立ちどまろうとしているのだと確信して、その規則正しい足音に心配そうに耳を傾けていた。

その足音がすぎさったとき、彼女はあざむかれたあとのように悲しかった。しかしまた、自分のあこがれの激しさに気づいて、その狂気のさたにほほえましくなった。

やがてすこしおちつくと、より合理的な夢想の流れに心をまかせながら、未来へのさぐりに努め、自分の生活の土台を組みたてようとした。

その人と共に自分は、ここ海を望むこの静かな館のなかに暮してゆくだろう。もちろん、二人の子供が生れよう。男の子は夫のものであり、女の子は自分のものである。すると、篠懸と菩提樹のあいだの草の上を走る子供たちの姿が見えてきた。そのあいだ自分たち父と母とは、子供たちの頭ごしに情熱のこもったまなざしをとりかわしながら、うっとりとした眼で子供たちの姿を見送るであろう。

彼女は、長いあいだそのように夢想し続けていた。そのあいだに月は大空を渡る旅をおえて、海の中にその姿を消そうとしていた。空気はますますすがすがしくなった。東方にあたって、水平線がほんのり明るくなってきた。右手の農場で、雄鶏が一羽鳴きだしたかと思うと、左手の農場で、多くの雄鶏がそれに答えた。そのしゃがれた鳴き声が鶏小屋の囲いをとおして、非常に遠くから聞えてくるように思われた。いつのまにか明るくなった空の巨大な丸天井のなかでは、星の姿が消えてしまっていた。

小鳥の小さな叫びがどこかで眼をさました。はじめはおどおどしていたさえずり声が、葉のあいだから聞えてきたが、やがて大胆になり、

いきいきと陽気になって、枝から枝へ、木から木へと、移っていった。

ジャンヌは、たちまち自分が明るい所にいるのを感じた。両手の中にかくしていた頭をあげると、暁の光の輝かしさに眼を奪われて、両眼を閉じた。

一部分大きなポプラの並木道のかげにかくされたあかね色の雲の峰が、血のような光を目ざめた大地の上に降りそそいだ。

すると、ゆるゆると、光り輝く黒雲を破り、木も、原も、海も、すべての地平線を真赤に染めながら、巨大なさんぜんたる太陽が現われた。

ジャンヌは幸福に気も狂わんばかりになるのを感じた。無我夢中の喜び、自然の壮麗さの前の無限の感激が、乙女の心を溶かしこんで、気が遠くなった。それは彼女の太陽だった。彼女の夜明けだった。彼女の人生の門出、彼女の希望の開幕だった。彼女は激しく太陽を抱きしめたい望みに、輝く大空にむかって両腕をさし伸ばした。なにか話しかけたかった。その花を開いた太陽のように神聖ななにかを叫びたかった。が、その心は、熱情を感じながらも無気力な状態のうちに、麻痺したようになっていた。そのとき両手の中に額を沈めながら、彼女は両眼が涙でいっぱいになるのを感じた。そして、甘い楽しい涙を流した。

再び頭をもたげたとき、日の出のすばらしい景観はすでに消えていた。彼女は情熱のさめたように心がしずまり、ちょっと疲れを覚えるのを感じた。窓を閉じずに、寝床の上に横になったままなお二三分も夢想にふけっていたが、やがて深い眠りに落ちた。あまりぐっすりと寝こんでいたので、八時に父に呼ばれたのも知らなかった。父が部屋へ入ってきてようやく眼をさました。

父は娘に屋敷の、《娘の》屋敷の美しくなったのを見せてやりたかったのだった。

庭の内部に面した構えは、往来から広いリンゴの木の植わった中庭でへだてられていた。村道といわれるその道は、百姓たちの囲い地のあいだを走って、半里もさきに行ったところで、ル・アーブルからフェキャムに至る大街道といっしょになっていた。

まっすぐな小道が、木柵から戸口の石段にまで達していた。海の小石でつくられ、わらぶきの屋根をもった小さな建物すなわち馬車小屋や物置の類は二つの農場のみぞにそって中庭の両側に並んでいた。

屋根は新しくふきかえられ、調度類はすっかり修繕され、壁も塗りかえられ、部屋は壁紙をかえられ、室内は全部塗りなおされていた。そして、色のくすんだ古い屋敷は、銀白色の新しい窓扉が、かえって斑点のように思われた。灰色がかった大きな正面も最近塗りかえられていた。

ジャンヌの部屋の窓の一つが開いているもう一つの正面は、遠く木立と風にいためつけられたニレの垣を越えて海を望んでいた。

ジャンヌと男爵は腕を組んで、どんな片すみも見のがさず家中を歩きまわった。それから、囲い場と呼ばれている場所を囲っている長いポプラの並木道をゆっくりと散歩した。草は木の下に葉を出して、緑色のもうせんをひろげていた。いちばん端の木立は美しかった。そして木の葉のしきりで分けられた曲りくねった小さな道を入りまじらせていた。とつぜん、一匹の兎が飛びだして、若い乙女をこわがらせたかと思うと、斜面を飛んで燈心草の中を断崖のほうへと逃げていった。

昼食後、まだ疲れていたアデライッド夫人が眠りたいと言いはったので、男爵はイポオルまで丘をくだろうと言いだした。

父と娘は、まずプウプル荘のあるエトゥヴァンの村を通り抜けて歩きだした。三人の百姓が、平常からの知りあいかのように、二人にあいさつした。

二人は、曲りくねった谷に沿って、海辺までくだっている傾斜した森の中に入った。

まもなく、イポオルの村が現われた。家々の戸口にすわって着物を繕っていた女たちが、二人の通る姿をながめた。真中に小川が流れて、戸口の前にたくさんのがらくたの積まれた坂路は、塩水の強烈な香りを発散していた。ところどころに小銀貨に似た光るうろこの残っている褐色の網が、あばらやの入口に干されていた。その入口からは、たった一つの部屋の中にうごめく大ぜいの家族の臭気が立ちのぼっていた。

小川の縁には、えさを求めて数羽の鳩が遊んでいた。

ジャンヌは、それらすべての景色が芝居の書割のように珍しく新しく感じられて、いろいろと見まわしていた。

しかしとつぜん、一つの壁をまわると、彼女は見渡すかぎりひろがった海を見いだした。海は不透明な青味を帯びて、油を流したようになめらかだった。

二人は海に面して立ちどまって、ながめわたした。小鳥の翼のような白い船の帆が沖を通っていた。右にも左にも大きな断崖がそびえていた。いっぽうには、岬のようなものがあって視野をさえぎっていたが、他方は海岸線が無限に延びて、その先はぼんやりとしてはっきりわからぬ一線となっていた。

海岸線の手近な裂け目の一つには、一つの港と、多くの家が見えた。泡のふさを海面につくっているさざ波がかすかな音をたてて、なぎさの小石の上に砕けていた。

丸い小石のある斜面にひきあげられたこの地方特有の小舟が、チャンを塗ったその丸い舟べりを太陽にさしだして、横たおしにころがっていた。二三人の漁師が、夕潮を待って出かける用意をしていた。

一人の船頭が近よって、魚をすすめた。ジャンヌは舌ビラメを一匹買って、自分でプウプル荘に持って帰りたいと言った。

それから、船頭が船遊びのご用はないかと言いだした。そして、はっきり覚えてもらうために、「ラスティック、ジョゼファン・ラスティック」と何度も自分の名をくりかえした。

男爵はその名を忘れないと約束した。

二人は屋敷への帰路についた。

大きな魚がジャンヌを疲らせたので、父は杖をそのえらに通して、二人が杖の両端を持った。そして、二人は子供のようにおしゃべりしながら、風を額になぶらせ、眼を輝かして、元気よく再び坂道をのぼりはじめた。しかし舌ビラメは、だんだんと二人の腕を疲らせて、ともするとその脂ぎった尾が草の上を這うのであった。

II

ジャンヌにとって美しく自由な生活がはじまった。彼女は本を読み、夢想にふけり、ただひとりで付近をさまよい歩いた。さまざまな夢想に心を走らせながら、あてどなくゆっくりと街道を歩きまわった。あるいは、こおどりしながら曲りくねった小さな谷へと降りていった。その谷の両側の山の頂には、金襴の法衣のように山いっぱいにハリエニシダの花が咲いていた。暑さに激しくされたその強く甘い香りが、香料を入れたぶどう酒のように彼女をうっとりさせた。そして、遠く浜辺に砕ける波の音は彼女の心を静かにゆすった。

あるときは、うっとりとした気持が斜面の密生した草の上に彼女のからだを横たえさせた。そして、ときどき、谷を曲ったおりや、芝生の窪地になっているところで、とつぜん水平線に帆を一つかかげて、太陽にきらきら輝く青うなばらの三角形の姿を見つけたとき、自分の上をあまかける幸福のひそかなおとずれを見たように、限りのない喜びを味わうのだった。

孤独への愛情がこの新しい国の気持よさの中に、ひろがった水平線の静けさの中に、彼女の心を襲った。あまり長いあいだ丘の頂に腰をおろしていたので、小さな野生の兎が足もとをピョンピョン飛びながらすぎてゆくこともあった。

しばしば崖の上を走りはじめた。海の微風に吹かれて、心は水を泳ぐ魚、空飛ぶツバメのように、疲れを知らず動く無上の喜びに震えた。

いたるところ地上に穀物をまくように、いろいろの思い出をふりまくのだった。それは、死のときまで根深く刻まれるような思い出だった。彼女にとっては、自分がその谷々のあらゆる地ひだに心を少しずつ投げ捨てているように思われた。

彼女は夢中になって海水浴をしはじめた。気強く大胆で少しも危険を意識しなかったので、その姿の見えなくなるまで遠くへ泳ぎ出た。自分のからだをゆすりつつささえているその冷たく澄んだ真青な水の中に心の安らかさを感じた。岸から遠く離れたとき、彼女はあおむけになって腕を胸の上に組みあわせると、紺碧に晴れわたった空高くはてしない視線を走らせた。空にはツバメが疾風のごとくに飛び去り、海鳥の白

い影がひらめいていた。海辺の小石に砕ける波の遠いささやきと、波のうねりを越えて滑ってくるもやもやとして、ほとんど捕えがたい地上のぼんやりとしたどよめきとのほかは、なにも聞えてこなかった。やがてジャンヌは立ちあがって、狂喜のあまり両手で水を打ちながら鋭い叫び声をあげた。

ときどき思いきって遠くへ泳いで出すぎると、小舟がさがしにきた。

彼女は空腹に血の気を失って屋敷へもどるのだったが、心は軽く身はさっそうとして、唇に微笑をたたえ、両眼は幸福にいっぱいになっていた。

いっぽう男爵のほうは、大じかけの農耕をもくろんでいた。試作を行い、増収をはかり、新しい器具を実験し、外国の異なった種類を移植しようと思っていた。そして毎日の一部分を、主人の試みを疑って、首を振っている百姓たちとの会話にすごしていた。

またしばしば、イポオルの漁夫たちと海へも出た。付近の洞窟や泉やとがった形の岩などをおとずれるとき、男爵は単なる一漁夫と同じように漁をするのを望んでいた。

微風の日々、風をいっぱいにはらんだ帆が、波の背にふくれあがった船体を走らせながら、船の両舷に、海の奥底までサバの群に追いかけられて逃げてゆくように見える太い釣り糸をひきずって行くとき、彼は、心配に震える手に、かかった魚が暴れだすとすぐ震えを感じる小さな綱を握っていた。

前の晩しかけた網をあげるためには、月の光を浴びて海へ出た。男爵はマストのきしむのを聞くのが好きだった。夜のヒュウヒュウと音をたてるすがすがしい突風を呼吸するのが好きだった。突起した岩石や鐘楼の屋根やフェキャムの燈台などを目当てに進みつつ、浮標を見つけるために長いあいだじぐざぐの船路をとったのち、船の甲板の上で扇形をした大きな赤エイのねばりつく背なかや、カレイの脂ぎった腹を光らせている日の出の最初の光に照らされながら、じっとしているのがうれしかった。

食事ごとに、男爵は熱心に自分の船遊びの話をした。すると、母親のほうも負けずに、何度クウイアールの農場にそった右手のポプラの大きな並木道を行ったり来たりしたかを話した。もう一つの並木道は、あまり日があたらなかったので歩くことはなかった。

夫人は、なるべく《運動をする》ようにと勧められていたので、つとめて歩いていた。夜の涼しさが消えるやいなや、夫人は婦人用マントと二枚の肩掛にからだを包み、赤い毛糸で編んだ帽子を重ねた黒いずきんに頭をしっかりとくるんで、ロザリイの腕によりかかっては外へ出るのだった。

そのとき彼女は左足をひきずりながら、屋敷のかどから林の最初の灌木まで一直線に、はてしなく何度もきりのない旅をくりかえすのだった。左足がすこし重くなっていたので、その道のこっちの端からむこうの端までずうっと、行きに一つ、帰りに一つ、そこだけ草の枯れたほこりだらけの二本の線をその痕跡としてつけていた。彼女はその痕跡の両端に一つずつの腰かけを置かせた。そして、五分ごとに立ちどまっては、自分をささえている忍耐強い気の毒な女中に、「腰かけようよ、ねえ、すこし疲れたよ」と言っていた。

そのうえ立ちどまるたびごとに、その腰掛の一つの上に、あるいは頭にかぶっている毛で編んだ帽子、あるいは肩掛を置き、次にはもう一枚の肩掛、ずきん、マントとじゅんじゅんに脱ぎ捨てた。そしてそれらが集って路の両端に大きな二つの着物の包となってしまうと、ロザリイが昼飯にもどるとき、自由になっている片方の腕にかかえて持ち帰るのだった。

午後になると、男爵夫人はまたその散歩をはじめた。しかし、午前よりは歩きつきがずっとゆっくりで、休息の時間も長くなった。ときどきは、そとへ持ち出された長椅子の上で、一時間も眠ってしまうこともあった。

男爵夫人は、私の心臓肥大と言っていたように、それを《自分の演習》と呼んでいた。

十年前に息切れを感じるようになったので、診療を求められた医師が心臓肥大と言ったのだった。そのとき以来その言葉が意味こそすこしもわからなかったが、深く頭の中に刻みこまれてしまった。彼女はしつっこく、男爵やジャンヌやロザリイに心臓をさわらせるのだったが、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com